■日　時：２０２０年1月２６日（日）
■場　所：立川教会
■説教題：「母マリアのイエスへの信頼」
■説教者：飯島　信
■聖　書：旧約 出エジプト記 33：12－23（旧 p149）
　　新約 ヨハネによる福音書 2：1－11（新 p165）
■**讃美歌**：98**「みどりの牧場に」**451「くすしき恵み」

お早うございます。
2020 年最初の月も最後の週を迎え、来週の礼拝は 2 月となります。高校生はセンター試験が終わり、いよいよ受験シーズンも本番となります。
私が学生であった頃ですが、受験と言えば、東京では必ず雪が降りました。しかも、積雪は半端ではありませんでした。交通手段に大きな影響が生まれ、電車がよく止まったのを覚えています。でも、ここ何年も、東京では大雪を経験していません。
先々週、地方から来た友人たちが、東京の気候を感じて驚いていました。温かいのです。日本海側の富山や長野の松本などから来た友人たちですが、地方の寒さは東京の比ではないのでしょう。それでも、しっかりと風邪への予防をお互いに心がけたいと思います。

さて、今日は、イエス様の母であるマリアについて考えてみたいと思います。
カトリックでは、マリアは聖母、聖なる母として、特別な存在であることは皆さんご承知だと思います。しかし、プロテスタントでは、マリアの存在はヨセフと同じく、イエス様の両親の一人であること以上の意味はありません。私たちにとってはそのような存在であるマリアですが、それでも聖書を良く見ると、イエス様と母マリアとの関わりについて深く学ばせられることがあります。マリアの信仰についてです。

今日与えられた聖書の御言葉であるヨハネによる福音書 2：1－11（新 p165）は、イエス様が初めて行ったカナの婚礼での不思議な業のことが記されています。1 節と 2 節。

１：3 日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。
２：イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。

ユダヤ教の結婚式の場面です。
この 3 日目と言うのは、週の 3 日目、火曜日のことです。ユダヤ教徒の結婚式は、創世記の天地創造からの由来で、「神は見て良しとされた」と言う言葉が、3 日目に 2 回使われていることから、火曜日が吉日とされ、この日に行われていました。
そして、結婚式が始まります。ところが 3 節です。

３：ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。

これだけを読むと、ぶどう酒が無くなったので、ただ補いたいと言う様子しか伝わって来ませんが、あるテキストによってその背景を知ると、この場面は非常に重要かつ緊迫した場面でのイエス様と母マリアとのやり取りであることが分かりました。つまり、この 3 節には、ただぶどう酒が無くなっただけではなく、深い意味が込められていました。

改めて言うまでもなく、婚礼は非常に大切な儀式です。特にユダヤ教の社会では、婚礼の日取りが決まっていれば、たとえ身内の者が亡くなっても、葬儀より結婚式が優先されます。さて誓約の場面です。新郎と新婦が並んで行われ、新郎は、誓約の時に飲みほした杯を足で踏んで割ります。これは、どのような喜びの時にも、エルサレムの滅亡を記憶するためでした。
余談ですが、「屋根の上のバイオリン弾き」と言う映画がありました。その場面で、新郎が杯を足で割る場面があったのですが、今回初めてその意味が分かりました。

ところで、婚礼の宴におけるぶどう酒ですが、重要な役割がありました。それは、誓約で使われ、宴席で使われるだけでなく、宴会の食事の後に行われる「7 つの祝福の祈り」と言う祈りに欠かすことの出来ないものでした。テキストによればですが、マリアがイエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と言った 3 節の言葉は、結婚式を締めくくる最後の祈りの前であったと思われます。もしぶどう酒がなければ、最後の祝福の祈りが出来なくなり、結婚式そのものが成立しなくなる、そのような切迫した場面でした。
追いつめられたマリアがイエス様に言った「ぶどう酒がなくなりました」と言う言葉は、単にぶどう酒がなくなっただけではなく、結婚式そのものが成り立たなくなると言う意味を持っていました。

それに対するイエス様の答えです。4 節。

４：イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」

「わたしの時」、それは、イエス様が神から遣わされた独り子であることを世に示す時です。「わたしの時はまだ来てい」ない。にもかかわらず、マリアは召し使いたちに言います。
5 節です。

５：しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。

恐らくマリアは、この結婚式全体の世話役であったのでしょう。イエス様だけではなく、弟子たちも招かれたのですから、よほど深い関わりを持っていたのだと思います。
私は、この 4 節と 5 節のやり取りを見て、2 つの聖書の御言葉を想い起こしました。一つは、マタイによる福音書第 7 章 7 節と 8 節、もう一つはルカによる福音書第 1 章 38 節です。

７：求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。
８：だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

それに、ルカによる福音書第 1 章 38 節後半、

３８b：「お言葉どおり、この身に成りますように。」

との御言葉です。

窮地に陥ったマリアにとって、自らが身をもって知らされた天使ガブリエルによる“受胎告知”の経験は、彼女の生涯ただ一回限りの、決定的な経験でした。マリアは、ヨセフと結婚する前に子どもが宿されると言う、ユダヤ教の戒律から言えば死罪にあたる恐るべき出来事の告知を、「お言葉どおり、この身になりますように」との信仰をもって受け止めました。そして今、同じ信仰をもって、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」との御言葉に生き、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と召し使いに伝えたのです。
私たちは、この時、このマリアの姿に、揺るぎない信仰者の姿を見るのです。
6 節。

６：そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが 6 つ置いてあった。いずれも 2 ないし 3 メトレテス入りのものである。

1 メトテレスは約 39 リットルです。約 100 リットル入りの水がめが 6 つ、全部で約 600 リットルと言う大変な量です。7 節から 10 節。

７：イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。
８：イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。
９：世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、

１０：言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」

水がぶどう酒に変わった最初の奇跡でした。

11 節。

１１：イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで弟子たちはイエスを信じた。

以上が、今日私たちに与えられた聖書の御言葉です。

ここで、もう一度、聖書の御言葉を振り返りたいと思います。

そのまま読んだだけでは納得出来ない言葉があります。4 節です。

４：イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」

イエス様がマリアに語ったこの言葉の前半です。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。」

明らかに母マリアが自分を見て言った言葉に対するイエス様の拒絶です。

しかし、その時、マリアはイエス様から拒絶されたにもかかわらず、不思議な言葉を語るのです。5 節、

５：しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。

拒絶されたにも関わらず、追いつめられたこの場面において、マリアはイエス様がこの窮地を救う何事かを成すことを信じていたのです。だから召し使いたちに「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言ったのです。

4 節のイエス様のマリアへの拒絶、それは、母マリアと息子イエスと言う肉親としての関わりの拒絶でした。マリアのイエス様への最初の呼びかけ、「ぶどう酒がなくなりました」との言葉は、困り果てた母親が息子を頼って投げかけた言葉でした。そして、イエス様は、マリアの自分に対する母親としての関わりを拒絶するのです。この窮地を救うために自分がしなければならない業は、母の息子への信頼によってでは出来ない、信仰によってのみ成せる業でした。

マリアは、イエス様から拒絶された意味を知るのです。

マリアのイエス様を見る眼差しは、肉親を見る眼差しでではなく、信仰の世界における信仰者の眼差しへと変えられました。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」との言葉は、母親として我が息子に対する肉親への信頼の言葉ではなく、肉親の関わりを断ち切られたことによって生まれた信仰者としての言葉となったのです。マリアが、イエス様に対するこの世の関わりから信仰の世界へ導かれたその時、水がぶどう酒に変わる奇跡は起きました。奇跡は、“我と汝”との関わりにおける信仰の世界において初めてなされ

るのです。

“我と汝”と言う信仰の世界を私たちは知らされています。
しかし、なお、その世界を本気になって生きようとしない私たちがいます。
私たち一人ひとりに知らされている信仰の世界を、本気になって生きてみようではありませんか。一日の内わずか数分でも良い、真剣に神様と向き合う時間を作り、神様と対話をするのです。
祈りましょう。